

潜水艦発射型も開発検討

防衛省 敵基地攻撃の手段に

防衛省が射程延長などの改良を進めている国産ミサイル「12式地对艦誘導弾」について、新たに「潜水艦発射型」を開発する方向で検討していることがわかった。潜水艦は敵に見つかりにくい特徴があり、政府が検討している「敵基地攻撃能力」を保有した際の手段となる。複数の政府・与党関係者が明らかにした。

敵基地攻撃能力の保有をめぐっては、政府は安全保障関連3文書の改定に合わせ、協議している段階だ

が、決定前から装備の検討を先行させている形だ。また、潜水艦は遠方の海域まで移動できるため、長射程

ミサイルを搭載することになれば、保持する防衛力などを「自衛のための必要最小限のものに限る」とした

防衛政策「専守防衛」との整合性も問われそうだ。

12式地对艦誘導弾の射程は約200キロ。1千キロ超に延ばす改良や、戦闘機や艦艇から発射するタイプの開発を進めているが、敵基地攻撃にも転用できる装備になる。

政府関係者によると、潜水艦発射型については年末に決定する新たな中期防衛力整備計画（2023〜27

年度）の期間中に研究に着手したい考えという。防衛省関係者は「潜水艦はどこにいるかわからない。相手は攻めにくくなり、抑止力を高められる」と言う。ただ、別の政府関係者は戦闘機や艦艇から発射するタイプの開発も進めていることから「同時に複数の発射型を開発できるのか」と語っており、年末までに慎重に判断する方針だ。（松山尚幹）